

## Safety Report

セーフティポ 若者

## SAFETY MAPで身近にある危険な場所を調べ、投稿を通じて安全意識を高める授業

サレジアン国際学園世田谷中学高等学校(東京都世田谷区)は高校1年の地理総合の授業の中にHondaが開発したSAFETY MAPを取り入れ、生徒たちに身近な道路の危険について考えてもらう機会を設けた。SAFETY MAPの活用方法や、生徒が活用する効果について、地理総合を担当する同校社会科教諭の京百合子さんにうかがった。

高校の地理総合では「地理情報システム(GIS)」が取り扱われ、その活用について学ぶ。GIS(Geographic Information System)とは、地理的位置を手がかりに、位置に関する情報を持ったデータを総合的に管理・加工したものを視覚的に表示し、高度な分析や迅速な判断を可能にする技術だ。SAFETY MAPも、このGISを活用したものである。

京さんはSAFETY MAPを取り入れたねらいを次のように話す。「SAFETY MAPには事故多発エリアをはじめとする様々な情報が表示されており、GISの好事例といえます。当校は私立のため、共通した通学路はなく、学校の最寄り駅からスクールバスを利用して登下校

している生徒もいるので、生徒たちは学校周辺のことをよく知りません。SAFETY MAPを使うことで、GISについて学びながら、学校周辺の道路環境について興味を持つきっかけにしたいと考えました。

SAFETY MAPを使う前段階として、「世田谷区民意識調査」の地域における日常生活での困りごとを生徒に提示し、世田谷区では「道路が狭くて危険」というのが課題となっていることを読み取ってもらう。その後、生徒たちはタブレット端末から朝日新聞社の「みえない交差点」(GIS)を使って、学校周辺の危険箇所(歩行者事故や自転車事故の多い場所)を調べた。そして、次の授業で、前回調べた危険箇所が



交通事故を減らすためにSAFETY MAPの効果的な使い方を生徒たちに提案してもらうことが授業の目標



京さんがSAFETY MAPの使い方を説明



SAFETY MAPに学校周辺の危険箇所を投稿

## SAFETY MAP(セーフティマップ)とは

SAFETY MAPはHondaが開発し、2013年から公開しているソーシャルマップである。日本中を走るHondaインターナビ(双方向通信型のカーナビ)搭載車から通信で送られてくるデータをもとにした急ブレーキ多発地点情報をはじめ、事故多発エリア情報やゾーン30情報などを地図上に表示。パソコンやスマートフォンで自由に閲覧でき、閲覧者が交通安全上危険だと感じた場所に投稿することが可能となっている。



SAFETY MAPは以下からパソコンやスマートフォンで誰でも閲覧できる  
https://global.honda.jp/safetymap/

どのような環境なのかをSAFETY MAPで確認する。ここでは、地図上の任意の地点の画像を様々な方向から表示できるというSAFETY MAPの機能を利用する。生徒たちは危険箇所の画像を見ながら何が危険かを考え、その内容をSAFETY MAPに書き込んだ。SAFETY MAPを使った生徒は「どこが危険かわかりやすいだけでなく、その原因も知る

ことができたので良かったです」「危険な場所を把握し、意識して気をつけることで事故が減ると思いました」「自分の地元でも多くの交通事故が起きていて驚きました。今後も危険だと思う場所があれば書き込みたいと思います」と感想を語った。

「SAFETY MAPは、自分が危険を感じた場所にその理由を書き込めるので、GISの体験には最適のツールです。自分たちが主体となって安全マップを『みんなで作る』という感覚を持てます。学校周辺の投稿ができたなら、自宅の周辺道路に関してSAFETY MAPに書き込んでもらうことを宿題にするつもりです。普段なんとなく通る道をよく見渡してみることで、事故に遭うリスクを下げられると考えています」と、京さんはSAFETY MAPへの投稿を通じて生徒の安全意識が上がることを期待している。

## Close Up

クローズアップ 交通教育センター

## 物流に携わる乗務員に自分の運転行動を振り返り、悪い習慣やクセに気づいてもらう

(株)C&Fロジホールディングス(本社:東京都新宿区)は、チルド物流を得意とする名糖運輸(株)とフローズン物流を得意とする(株)ヒューテックノリンが2015年に経営統合し、誕生した総合物流企業グループである。同社ではグループ全体でおよそ5000名の乗務員が物流に従事している。そのため、2015年度から交通教育センターレイボー埼玉(以下、レイボー埼玉)などを利用し、乗務員やその指導者への安全運転研修を実施している。

この安全運転研修について、同社安全管理部 課長 間野時満さんは「ハンドルを握れば、社歴にかかわらず、公道ではプロドライバーと見なされます。プロドライバーにふさわしい安全意識と運転技術を身につけることを目的に、入社1~2年目の乗務員を対象とした研修を毎月行うことにしました。参加体験型の実践教育によって、受講する乗務員が自分の運転行動を振り返り、悪い習慣やクセに気づいてほしいと考えています。また、この研修は業務中に事故を起こした乗務員も受講する

ことになっています」と話す。5月9日に実施された安全運転研修には乗務員10名が参加。午前中はブレーキングの訓練で、業務中に使うことはないトラックでの急ブレーキを受講者に体験してもらう。午後は車庫入れなどの後退訓練がメインとなる。同社における事故の多くは得意先の構内や駐車場内での軽微な接触事故であることから、それを防ぐために車庫入れや、車両感覚を体得するための訓練に時間を割いているのだ。



他の受講者が車庫入れをする様子を観察して、安全確認の手順などについて受講者全員で話し合う



2つのパイロンを結び線上に車体の前端、前輪、後輪、後端を合わせる練習



車庫入れをする前に降車してトラックの周囲を確認する受講者

後退訓練を始める前に、他の受講者が車庫入れや縦列駐車の様子を観察して、駐車場にクルマを停める際の安全確認の手順や注意すべき点を受講者全員で話し合い、再確認した。

その後、受講者はトラックに乗車し、2つのパイロンを結び線上に車体の前端、前輪、後輪、後端を合わせる練習を繰り返す。車体の四隅とタイヤの位置を意識することで、より正確な車両感覚を身につけてもらうためだ。そして、車庫入れや、コース上に置かれたマーカーを左右それぞれのタイヤで踏んでいくという練習を行った。

「皆さんが身につけた安全運転技術を十分に活かすためには危険を早期発見し、危険に近づかないことが重要です。特に、目視やミラーで見えないトラックの死角を意識してほしい

と思います」とインストラクターがアドバイスし、研修は終了した。

普段は宮城県内でハンドルを握っているという受講者は「車庫入れなどで基本的な安全確認の大切さに気づくなど、これまでの運転を見つめ直す良い機会になりました。今後『安全』をより意識して仕事に臨みたいと思います」と感想を語った。

研修中の受講者の運転行動について、担当するインストラクターが「安全意識」と「車両感覚」の2つの観点で評価した結果を(株)C&Fロジホールディングスに提出している。同社では、これを各職場での乗務員のフォローアップに活用しているようだ。「私たちでは気づきにくい乗務員一人ひとりの運転のクセが把握できるので、研修後も職場で具体的な指導をすることができます」と間野さんはいう。



正面の信号の点灯に合わせて急ブレーキをかける反応制動を合わせる練習